

---

平成 26 年

# 10 月の普及活動状況

---

## ダイジェスト版

～県下 10 農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

活力ある新産地づくり

中濃農林 ■ ゆず **ゆず出荷目揃え会開催支援**

かみのほゆず(株)では、11月から始まるゆずの収穫に向けて、出荷目揃え会を開催した。収穫されたゆずは、製菓用（恵那川上屋など）、果皮利用、搾汁用と用途別に荷受けされるため、外観の形状や品質について出荷基準の確認が行われた。ゆずの着色具合を考慮し、本年の荷受けは11月3日からスタートすることとなった。

かみのほゆず(株)では、昨年から自社での搾汁量を増やして、搾汁率の向上に取り組んでいる。荷受けから搾汁までの作業をスムーズに行うため、荷受けが集中しないように生産者へは、まとめて収穫せずに着色したら随時出荷してもらうよう協力を依頼した。

農業普及課からは、重点活動として取り組んでいる課題「ゆずの里上之保 元気な産地づくり」の栽培実証や雑草管理の作業軽減実証（ナギナタガヤによる草生栽培）、農家台帳整備について進捗状況を報告した。



【目揃え会風景】

恵那農林 ■ クリ **新たな企画で、東美濃産‘ぼろたん’を強力にPR！**

～ぼろたん列車の運行、アンテナショップでの限定販売！～

東美濃ぼろたん研究会（事務局：農業普及課）では、秋のイベントへの出店・PRに加え、今年『明知鉄道を走るぼろたん列車の運行』を10月20日に実施した。

車内で乗客に振る舞う弁当には、目玉の‘ぼろたん’以外にも地元の農産物を揃えようと農業普及課で調整し、ブロッコリー、トマト、なす、きねふりもちが素材として使われた。

当日は、ぼろたん列車に乗車した30名の参加者の前で、普及指導員が地元のクリやぼろたんについて説明するとともに、笠置山栗生産組合の協力を得て、焼き栗の提供や車内販売を行うなど、乗客にとってぼろたんづくしの思い出深いイベントとなった。

また、県が開設したアンテナショップ（名古屋市オアシス21）で、10月18・19両日に‘ぼろたんフェア’を開催した。試食と販売PRを通じて、県外の方にぼろたんの特長を理解していただき、更にメディアもぼろたんを取材しテレビで放映されるなど、知名度を高める絶好の機会となった。

今後、ぼろたんの入手を希望する消費者にどのように応えていくか、同研究会で検討を続けていく。



【ぼろたん列車でのPR】



【取材を受けるぼろたんフェア】

農業経営課 ■ ブロッコリー **県関係機関による検討会を開催**

10月2日、ブロッコリーの県担当機関（農産園芸課、農林事務所、農業技術センター、中山間農業研究所）を招集し、今後の生産対策に向けた検討を行った。

各地域の現状と実証ほの経過報告の後、現地で農業技術センター及び岐阜、西濃管内の生産者圃場にて、品種や施肥試験の取組状況を確認し、情報共有を図った。



【現地検討会】



## 売れる農畜産物づくり

### 西濃農林 ■大豆 難防除雑草の除草試験を実施

帰化雑草「ヒロハフウリンホオズキ」の大豆生育期間での対策について、農業技術センターと農業普及課との協働研究として養老町に展示ほを設けている。中耕する方法と中耕せずに畦間に除草剤を散布する方法が比較検討され、「ヒロハフウリンホオズキ」の発生状況調査を随時連携しながら実施した。「ヒロハフウリンホオズキ」の多発ほ場では中耕せずに畦間に除草剤を散布する方法が効果的であることが判明した。現地での活用を視野に入れ今後ともデータの蓄積と分析を連携、支援していく。



【中耕後に畦間に発生したヒロハフウリンホオズキ】

### 郡上農林 ■だいこん 大阪市場・量販店における販売実態調査を実施

10月16日、ひるがの高原だいこんの主要出荷先である大阪の市場及び量販店にて、だいこんの販売実態調査を行った。県大阪農産物情報センターの協力のもと、だいこん販売の現状把握や、産地の評価・要望等に関する聞き取りを行った。

市場・仲卸担当者からは、ひるがの高原だいこんの品質の良さ・安定度への高い評価が聞けたが、一方出荷量の安定(=波を小さくする)について強く要望された。

量販店においては、だいこんは全般に特売品扱いの傾向が強く、品質に見合った価格がついていない現状だった。

しかし、一部に野菜を丁寧に扱い(高値でも)品質重視で販売している店舗もあり、こうした店はPR拠点に活用できるのではないかと思われた。

今回の調査結果を今後の普及支援活動に活用し、ひるがの高原だいこんの有利販売やだいこん農家の経営安定の一助としたい。



【量販店でのだいこんの販売状況】

### 下呂農林 ■水稲 コメの品質・食味調査を実施

10月1日の他、県が生産者やJA、市と共同で運営している各種実証ほの玄米の品質及び食味の調査を行った。

本年度は、夏の長雨・日照不足による品質劣化が懸念されたが事前にこれを想定した栽培管理の徹底を図った結果、米の外観については「例年並み」、食味値については「例年並みかそれ以上」となった。台風による穂ずれや冠水被害についても、翌日のラジコンヘリ防除により被害を軽微なものにとどめた。

今後は、日本穀物検定協会が行う食味試験や、米・食味鑑定士協会が行うコンクールへの出品に対し支援を行う予定である。



【品質判定の様子】

### 飛騨農林 ■夏秋トマト 飛騨トマト部会優秀ほ場視察を開催

10月3日、飛騨野菜出荷組合トマト部会では、模範的な栽培を行う部会員の栽培状況や管理方法について、その情報を部会員相互で共有できるように視察研修を実施した。

視察研修への関心は高く、当日は飛騨および下呂地域の8部会から、関係者を含め80名が参加し、2班に分かれ、高山トマト部会1カ所、丹生川トマト部会2カ所を視察した。

農業普及課では、選定したほ場ごとに、栽培状況や管理方法について説明を行った。

参加した部会員は、今年为天候不順にもかかわらず、着果



【部会員によるほ場視察】

が良好で、管理も行き届いている優秀ほ場に感心するとともに、部会員間で活発な技術検討が行われ、有意義な情報共有の場となった。

### 東濃農林 ■ 瑞浪市 第8回全国マコモサミット2014in瑞浪が開催

10月10～11日、瑞浪市において全国23都府県のマコモ生産者や関係者約300名が集い、全国マコモサミットが盛大に開催され、全国各地の事例報告やマコモ料理の試食、講演会、現地視察などで情報交換が行われた。

瑞浪市では、中山間地域の平山地区を中心に、耕作放棄地対策及び特産品開発事業を目的に、平成18年度よりマコモタケの栽培が始まった。サミットでは平山集落での取り組みや、農産物直売所「きなあつ瑞浪」の設立に繋がった経緯等の事例発表が行われた。また、中部学院大学との交流も行われており、学生からマコモの料理レシピ紹介が行われた。

農業普及課は本サミットにおいては実行委員会に参画し、大会運営等の他、品種試験や雑草対策の栽培実証や販売促進など、当初から支援してきた。今回のサミットを機に、瑞浪市のマコモがさらに発展し、地域振興に繋がるよう支援していきたい。



【全国マコモサミット2014in瑞浪の様子】

### 農業経営課 ■ 飛騨牛（繁殖） 飼料用稲給与に関する技術研修会を開催

水田フル活用の推進を背景に岐阜県内でも飼料用稲の生産拡大が見込まれることに鑑み、10月2日、恵那総合庁舎において「飼料用稲給与に関する技術研修会（主催：畜産課）」が開催され市町村畜産指導者、農業普及指導員等約20名が参加した。

飼料用米生産・利用の現状について畜産課から説明後、農業革新支援専門員が飼料用稲の牛への給与方法（飼料計算方法）について解説を行った。飼料用稲はデンプンを多く含む良質飼料として繁殖和牛への利用価値が高い一方、タンパク質含量の多いマメ科牧草等を給与して栄養のバランスをとることが必要であるが、研修会には県内全地域の技術員が参加し、今年度収穫した飼料用稲の給与までに、適正な給与技術が県内に普及されることが見込まれている。



【飼料用稲給与技術研修会】

## 戦略的な流通・販売

### 揖斐農林 ■ かぼちゃ 地産地消かぼちゃフェア開催！

揖斐郡内では平成22年からカボチャの生産振興に、揖斐農林事務所・JAいび川・揖斐川町・大野町・池田町が一体となって取り組み、昨年からは地産地消の推進にも活動の幅を広げている。

揖斐郡内で今年収穫された甘くておいしいカボチャ品種「ロロン」。本年は、かぼちゃパウダーに加え生果にも利用を拡大した。揖斐郡内の14の企業団体に利用いただくことができ、ハロウィンに合わせた10月18日（土）から31日（金）に「地産地消かぼちゃフェア」として各店舗で販売された。

主催する揖斐農林事務所、管内三町、JAいび川では、かぼちゃフェアのためにポスターや食べ歩きマップを作成し、各種媒体によるPR活動を行った。これからも地域の消費定着をめざして支援していきたい。



【かぼちゃフェアをPRする職員】



## 多様な担い手の育成・確保

### 岐阜農林■担い手 岐阜地域農業担い手情報交換会

10月3日、岐阜市ハートフルスクエアGにおいて、農業関係団体との共催で岐阜地域農業担い手情報交換会を開催した。管内の新規就農者11名、研修生5名の他、関係団体を含めて約90名の参加があり、盛大な意見交換の場となった。

中小企業診断士の講演では「戦略する農業」として、「新規就農者が今後発展するためには、将来を見越した“戦略”が必要である！」と力説され、事例発表の若手生産者2名からは、現在の農業経営に至るまでの経緯や苦労話などが熱く語られた。農業普及課では、この交換会を契機として、若手農業者のネットワークづくりなど引き続き新規就農者等の支援を進めていく。



【発表する青年農業士】

### 可茂農林■集落営農 「農事組合法人とみか」設立へ！

富加町の集落営農組織「加治田営農組合」が、「農事組合法人とみか」の名称で、平成26年10月26日に設立総会を開催し、11月7日に法人登記することとなった。

本組合は、富加町加治田西部地区を中心に特定農作業受委託により西部地区の7割を超える農地集積を進めており、法人化後に農地中間管理機構を通じて利用権設定を行う方針である。

次年度は、東部地区を中心に地域での話し合いを進め、さらなる農地の集積を図っていくとともに、将来的には、町全域の農業の担い手も視野に入れ、地域農業発展のため、機構集積協力金をどのように活用していくか検討に入る。

農業普及課では、法人化に向けて、スケジュールの確認、事業目論見書や定款の内要検討、組織のデザインや事業展開の提案など、継続的に支援うとともに、関係機関と連携して農地中間管理事業のスキームや事業の活用方法等について支援を進めてきた。

今後は、持続的・安定的な法人経営に向けた事業の提案、新たな作物導入等、多角経営や付加価値向上への取り組み、オペレーター等人材確保・育成について総合的に支援するとともに、新たな農地集積を加速化すべく、関係機関と連携を強化していく。



【法人化検討会の様子】

### 可茂農林■集落営農 農事組合法人ふしみ営農が日本農業賞岐阜県代表に選出

10月3日第44回日本農業賞に係る現地審査が、農事組合法人ふしみ営農（以下「(農)ふしみ営農」）で実施された。

(農)ふしみ営農の前身である伏見機械化営農組合は、昭和51年に基盤整備後の地域農業をどのように発展させていくかが課題となる中、有志12名が立ち上がり、請負耕作などの要望に応じるなど、農業機械の過剰投資抑制を図ることを目的に設立された。そして平成26年1月に組合の事業を継承する形で、(農)ふしみ営農として法人化された。

現地審査では、水田経営にとどまらず、地産地消や食農教育活動、有害鳥獣捕獲隊によるイノシシの駆除、東日本大震災の復興支援活動についてパネルを使用した説明が行われ、10月14日、第44回日本農業賞集团組織の部岐阜県代表に選出された。

今回の選賞にあたり、農業普及課をはじめ関係機関が一丸となってデータ収集にあたったことにより、営農組合のみならず地域全体に活気がみなぎり、普及活動の推進にも良い影響を与えている。



【日本農業賞現地審査会】